

## 幸運な第九師団

— 開拓義勇軍から満州、台湾へ —

富山県 七山 幸雄

富山県の福光町で大正十年六月九日に生れたのですから昭和十六年徴集、兵隊検査では第一乙種ですから、現役兵として昭和十七年一月十日に、旧歩兵第三五連隊、当時は富山の東部第四八部隊に入営したのです。

留守宅の方は両親と弟が四名、米作農家でした。

入営し、第三機関銃中隊の大隊砲（歩兵砲）隊へ入ったのです。それで終戦まで大隊砲専門でした。砲は駄載ですので、一頭に砲身、車輪共積むのですが、私は農業をやっていたから駄馬には馴れていたのので助かりました。一期の検閲後迫撃砲が部隊に来ました。口径は十センチぐらいで、床盤の上に据え付けるわけです。

軍隊の訓練はつらいとは思わなかった。内務班でも覚悟はしていて、まあ炊事の兵隊には食缶洗いなどで

大分しぼられました、そのためにキチッと仕込まれたのだから、あれも結果的には良かったのかも。

一月入営、満州には二十二日に出発した。釜山―老黒山へと行ったのだが、そこに第九師団の歩兵第三五連隊が駐屯していた。国境警備をしながら訓練を受けたのだが、一期の検閲は六月だった。砲は一個小隊二門、二個小隊で一個中隊、一門には観測・砲手等で十五名です。迫撃砲は国境に据えていた。

寒さは零下三十度ぐらい、兵舎は下を土に埋め、窓だけ外に出ている。ベーチカ（煉瓦で煙突状）なので、兵舎内は寒くなかった。冬期演習などの時、日中汗かいて八錐型天幕の中で凍傷になったりした。初年兵は天幕の外側に寝るので、服を来たまま寝ても寒い。真中の方は偉い人。

特に馬の当番が仲々つらい、冬でも馬は外におくので馬体が真白になっている。体から出る湯気が凍るのです。馬の手入れは外でするのだが、冬は刷毛と金櫛でやる。馬の呑む水は河から汲むのだが、凍っているから氷を破ると中の水は比較的温かい。

初年兵は辛い、厩当番は右翼（成績上位）からつく、責任の問題があり、馬を殺したり放馬したりするからです。しかし、放馬しても馬は戻ってはくる。狼の鳴き声は聞いたことはあるが、人馬共に襲われたことはなかった。

初年兵の時一選抜の上等兵となったのだが、私は十六歳の時から満蒙開拓義勇軍として牡丹江にいた。加藤完治先生に茨城県の内原で三か月程教育を受け、百六十人の同期の仲間と牡丹江へ行ったのです。屯田兵のようなもので軍事教練と農業実務、教育を受ける。

兵舎のようなオンドル式の宿舎の中で、三十名づつ両方に寝られる。そこには同期生だけで住んでいた。教官は軍人経験者で軍事を、農業は農業学校の人で、年配の保健婦さんもいた。

何々中隊という軍隊式で、遊び場所は無いが、手紙を書いたり、レコードを聞いたりした。兵器は渡されていた。十六歳から入隊まで、満州で国のためと思っ  
て行ったのだが、入営するため内地に帰ったが、軍隊もまた満州だった。そのため、気持ちも体も他の人よ

り染だった。

上等兵になり下士候に募集されたが、満州開拓義勇軍なので応募出来ませんと言ったら「陛下の命令だ」と、人事係准尉（魚津の人）に言われた。晩に呼ばれたので、おっかなびっくりで行ったら、准尉さんは同県人だったので結局は旅順の下士官候補者隊へ入った。教育は学校と同じで、一か年で卒業し伍長に任官した。下士官教育隊には関東軍から三千名入ったが、優等生五名には恩賜の時計が下賜されたが、私は十四歳だった。私は大隊砲、重機関銃、三十七ミリ速射砲の教育を受けたわけです。

卒業して原隊に復帰したが、成績の良い者は自分の隊におくというのだが、古参兵がいてやりにくかった。第九師団は昭和十九年、関東軍から離れて、台湾軍隷下第三十二軍の沖繩へ行くことになった。兵備はそのままであった。

半年ぐらい沖繩本島の南部に陣地構築をした。海岸を半要塞化したのです。満州から沖繩へ来たのだから、温度も湿度も違うし、風俗も食べ物も異なる。私は十

六歳の時から外地へ出ていたので、割合順応性があつた。

作業割り当ては短期築城なので厳しかった。そのため、「こんなことをしたら兵隊は死んでしまう」と楯をついた下士官もいた。下士官は上級者と兵隊との間で板挟みになった。そのため、隊長、人事係も更送になったこともありました。

築城するにも機材は余りなく、内地からの資材も充分送られてきていない。我が第九師団は第三十二軍隷下、軍は第十方面軍（前の台湾軍）であったが、戦局はお構いなく悪化し、上層部は随分焦っていた訳でしょう。

沖繩大空襲の時は米軍機七百機で那覇市は焼けた。その時、警備に行ったが相当の被害が出て、住宅など焼け、米空軍のなすがままで、対空砲火は全然駄目、対戦する飛行機は無し、無抵抗そのままでした。

その後、昭和十九年十二月二十八日、南方へ転戦するのだということで沖繩を出港した。護衛する航空機も無く、上陸した所は台湾でした。結局、我が第九師

団は、金沢―満州―沖繩―台湾ということで、大東亞戦争になって満州から台湾まで無傷だった。最後まで連隊旗を守ったのは九師団だったわけです。

台湾で、歩兵第三五連隊は新竹の山の中で陣地を作っていた。フィリピンの次は台湾か沖繩といわれていたので、台湾へ重点をおき我が師団が転属となったのです。台湾沖海戦、航空戦のことが大きな問題となっているが、我々はそんなことがあったのかと思う程度で、それを目撃もしなかった。

防禦陣地は大体沿岸地域で、水際防禦によって上陸時叩くのが一般的戦術なのだが、日本軍は防禦が苦手で、作戦要務令にあるようにやはり攻撃にまさる防禦なしということを重視していたようだった。

第九師団は日露戦争や日支事変では大変だったが、我々の時は犠牲も無く、余り苦勞もなかった。しかし、若しあのまま沖繩南部にいたなら、玉碎していた筈だし、私も真正直な方だから一番先に戦死していたろうと思います。大小にかかわらず、何時でも軍隊は運隊だった。一番危険な所へ出されたつもりが、結果的に

は犠牲が無かった。我々自身も郷土部隊の九師団は、日本軍の最強師団だと自負していたからです。

次に台湾での状況ですが、住民との関係は割と良かった。中隊長は現地で結婚した。戦後の住民関係も変わらなかった。食料についても、敗戦前も後も余り変わらない。米も野菜も、肉、魚、甘味、果実もあったのだから、恵まれた戦中、戦後だったといえ、他の方面の話の聞くとか何か申し訳ないような気がする。

私は有難くも復員出来たが、心配していた満蒙開拓義勇隊の仲間には皆引揚げることが出来て良かった。私の復員は、昭和二十一年二月二十七日で、外地部隊としては早かった。しかし、当時内地には勤め先も少なく、天職である農業を現在までやっています。今考えても、農業をやった方が良かった。恩給より年金より、一日一日元気で天職を努められることの幸せを感じています。

毎年、台湾の同年兵会をやるが、私は農業をやっていて良かった。勤め人は退職し、年金は女房が握り、生活設計の中に入っているので「お前が一番幸せだ」

といわれる。農業をやっていれば、早寝、早起きで健康にも良いし、土地の上に足を着け、自然の中で、土地で生活すること、私も一番幸せ者だと思っています。

## 暗号将校が

### 少年飛行生徒の教育

香川県 鎌倉繁治

大正九年五月七日、香川県木田郡三木町大字鹿庭に生れ、当時は祖父、両親、姉一人、妹二人、実家は雑貨商を営む。昭和十五年徴集で、第十一師団歩兵第十二連隊に現役兵として入営が決定しましたが、当時部隊は満州第九三六部隊として東安省虎林県宝東にあつたのです。陸軍記念日の昭和十六年三月十日、丸亀の補充隊で軍服に着替え、速やかに宝東へ、歩兵第十二連隊だけで人員は千三十一名が坂出―羅南を経由ということです。

他に徳島、松山、高知の歩兵と騎兵、砲兵、工兵、